

東北農政局秋田県拠点
令和 7 年度版

あきたで生きる

「あきたで生きる」とは？

生きるには、農林水産業を生業とし、暮らし、生き生きする、仲間を作る、効果を現すという意味が込められています。そのような秋田で生きる人々に焦点を当て、秋田の地域資源を活用しながら生き生きと暮らし、地域資源を活用することでヒトやモノ・コトの価値が発揮され、秋田を活かすような取組について、令和5年3月から東北農政局秋田県拠点のWEBサイトで紹介しています。

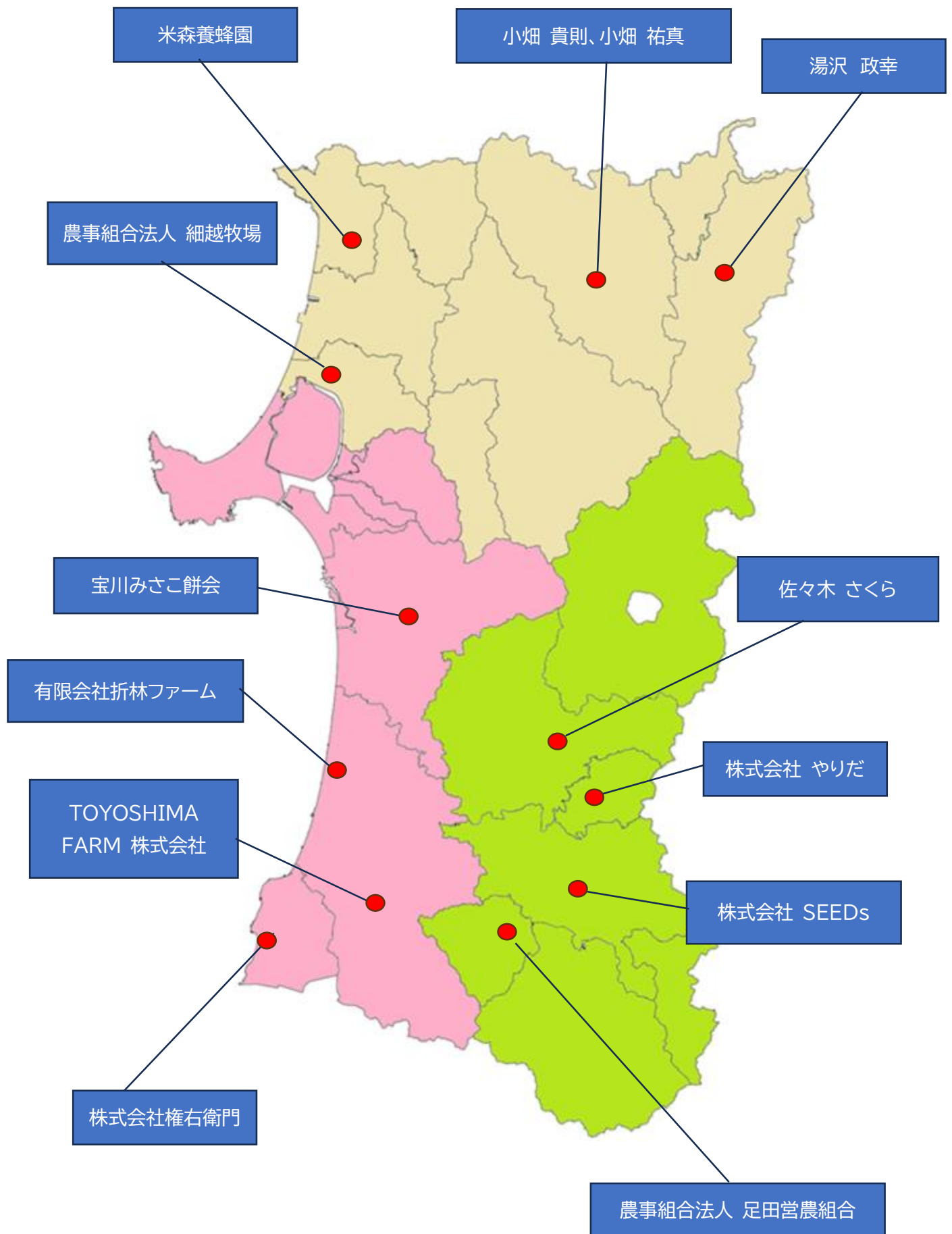
令和7年度に紹介した取組を1冊にまとめました。



あきたで生きる

令和 7 年度

令和 7 年 4 月	有限会社折林ファーム（由利本荘市） AI・再生可能エネルギーで農業の確立めざす！	…… 1
5 月	湯沢 政幸（鹿角市） 「かづの牛」と「民謡」共に未来へ継承したい！	…… 2
6 月	佐々木 さくら（大仙市） 目標はオープンカフェの開業と日本酒の共同開発	…… 3
7 月	宝川みさこ餅会（秋田市） 宝川で餅づくり 37 年、女性の活躍を後押しする！	…… 4
8 月	農事組合法人 細越牧場（三種町） ストレスのない環境を整え良質な生乳生産を目指す	…… 5
9 月	株式会社 SEEDs（横手市） 夢ある儲かる農業の先駆者を目指して	…… 6
10 月	株式会社権右衛門（にかほ市） 400 年超える伝統農業から現代型営農モデル探る！	…… 7
11 月	小畑 貴則、小畑 祐真（大館市） 親子で新規就農! GI「大館とんぶり」を未来へ	…… 8
12 月	農事組合法人 足田営農組合（羽後町） 楽しく働き、多くの人に喜ばれる花を届ける！	…… 9
令和 8 年 1 月	TOYOSHIMA FARM 株式会社（由利本荘市） ワインづくりに挑む若き農業者～地域の未来を描く	…… 10
2 月	米森養蜂園（八峰町） 養蜂で秋田県農業の一助になりたい！	…… 11
3 月	株式会社 やりだ（美郷町） 先進的な取組で法人経営の発展を目指す！	…… 12



AI・再生可能エネルギーで農業の確立めざす！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



事業者名 有限会社折林ファーム
(由利本荘市)

代表者 取締役 三浦 徳也

経営概況

経営面積 | 112ha

作物 | 水稻、たまねぎ、そば、ばれいしょ等

養鶏 | 比内地鶏 1.3 万羽

社員 | 8名

販売先 | 寿司店や県内スーパー、介護施設、レストラン等



有限会社折林ファーム HP

東京からUターン後、営業の仕事で農家と交流するうちに自分も農業をしたいと現法人に飛び込みました。先代社長が倒れたことをきっかけに、若手社員でありながら平成31年社長に就任し、由利本荘市松ヶ崎地域の農地を任されることになりました。持ち前の営業力で販路を開拓し農業者や実需者とのネットワークを広げ、地域の若い農業者の目標とされる存在となっています。

▶ きっかけ

社長になった時、法人の経営は苦しくベテラン社員が離れ、借りていた農地も引き上げられそうになりました。地権者との交渉は難航しましたが、最後は「地域の農業を若い我々が今後も継続し守りたい」という熱意が伝わり、農地を任せても良いという人が増えてきて、法人として再スタートできました。

▶ 取組

地域では担い手が著しく減少し、法人の受託面積が年々増え、地域の担い手として期待される反面、就業時間が不規則になるなど法人の負担は増えました。継続的に社員を確保するため、合理的な労務管理を行うとともに、スマート技術を活用して省力化を進めています。



●格納庫でハイポーズ(折林ファームの皆さん)

主力の水稻では、令和元年度に産地パワーアップ事業を活用してミニライスセンターを整備しました。令和8年度に松ヶ崎地域の基盤整備事業が完了を予定していることからドローンを使用した直播栽培の作業や新たに導入した管理システムでのほ場管理は、作業時間の大幅な低減につながるそうです。

たまねぎは、大手外食チェーンからの需要増により作付面積は増えており「秋田県産たまねぎ産地形成コンソーシアム」による「秋田県産たまねぎの生産性改善による自給率向上モデル実証」に参加し、最先端のロボットトラクターやAI自動選別機導入などによる人手と作業時間の削減に取り組んでいます。



たまねぎ選別機について説明する三浦代表

比内地鶏の生産も手掛けており、令和7年3月に従来の6棟の鶏舎に加え6棟を増築しました。今後2棟を増築し飼養羽数を年間2万羽に増やす予定です。

す。ソーラーシート、小水力発電を電源にした自動給餌システムや監視カメラと携帯電話を組み合わせた鶏の状態確認システムを稼働中とのことです。



●比内地鶏の鶏舎6棟(7年3月完成)

▶ これから

「昔からここで農業をしてきた人から見れば、我々は「よそ者」かも知れないが、若い社員は本当によく地域のひとと仲良くなった。小水力や太陽光などを利用した再生可能エネルギーを農業に活用しているが、それだけに留まらず、そのエネルギーで公共の電気自動車やWi-Fiネットワークと監視カメラの運用も考えており、「地域のエネルギーを使った農業と地域防災」の形を確立し、地域と農業を継続し守れるようにしていきたい。」と話してくれました。

(●写真:有限会社折林ファーム提供)

「かつの牛」と「民謡」共に未来へ継承したい！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



(鹿角市十和田)

湯沢 政幸

経営概況

繁殖牛頭数 | 日本短角種4頭、黒毛和種4頭
牧草地 | 約1ha
構成員 | 1名(本人)
出荷先 | 秋田県家畜農業協同組合鹿角支所
あきた総合家畜市場

令和7年1月30日に、地域の特性を生かした農産物を保護する農林水産省の「地理的表示(GI)保護制度」において、鹿角市及び小坂町のブランド牛である「かつの牛」が登録されました。その「かつの牛」を絶やすまいと地元企業で働きながら、日々奮闘している若手畜産農家を紹介します。

▶ きっかけ

祖父の代から、かつの牛で知られる「日本短角種」の繁殖農家を営んでいた湯沢家の三男として育った政幸さん。小学生の頃から父親を手伝い、牛の世話をしていたそうです。平成15年に高校を卒業後、地元企業に就職し、サラリーマン生活をスタートさせました。



放牧を待つ「かつの牛」

その後、平成27年に第一線で活躍されていた父親の他界をきっかけに、繁殖事業を承継した長兄を手伝ったそうです。しかしながら、そのお兄様も令和6年にご不幸にあわれ、政幸さんは、事業の継続に迷いもありましたが、祖父の代から続く繁殖農家をここで辞めてしまうのはもったいないと、サラリーマンと繁殖農家を兼業で取り組むことを決意しました。

▶ 取組

日本短角種の繁殖だけでは、十分な収入が確保できないことから、平成27年に黒毛和種の飼養も開始し、現在は、日本短角種4頭、黒毛和種4頭の繁殖牛を飼養しています。政幸さんの平日は、朝5時に起床し、真っ先に牛に給餌をしてから出勤、帰宅後は、牛に夜の給餌を行っているそうです。

鹿角地域では、古くから5月上旬から10月下旬に山へ放牧する「夏山冬里方式」が行われており、比較的手間がかからずに飼養できることから、兼業でも十分経営が可能とのこと。日本短角種は、放牧適性が高く、牧草だけでも体が大きく育つ特徴があり、自然交配で毎年1頭、人の手を借りずに出産が期待できるのもメリットだそうです。



●夏山で伸び伸び育つ「かつの牛」

▶ もうひとつの顔

政幸さんは、幼い頃から祖父や父親に民謡や三味線の指導を受け、現在でも週一回の練習を欠かさず、数々の大会やライブに出演しています。中でも平成28年に開催された「日本民謡協会民謡民舞秋田県大会」では、見事優勝し全国大会にも出場した経歴を持っています。また、御子息をはじめ、地域の子どもたちに民謡を教えるなど、伝統と文化の継承活動にも力を入れているそうです。



●TV番組にて民謡を歌う政幸さん

▶ これから

経営の維持安定を図りたいことから、黒毛和種、日本短角種の繁殖牛を1頭ずつ増やしたい。将来は、息子たちが、繁殖農家、民謡の歌い手を承継してくれたら嬉しいと話してくれました。

(●印写真: 湯沢政幸氏提供)

目標はオープンカフェの開業と日本酒の共同開発

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



大仙市(横堀)

佐々木 さくら

経営概況

経営面積 | 17ha
 作物 | 水稻、大豆、野菜(葉ネギ、白ナス等)
 販売先 | JA、市内飲食店
 | 納豆メーカー

農家に生まれたため元々農業には興味があり、家業を継ぐことを考えて農業高校に進学しました。在学中には4Hクラブに加入し、この活動を通じて農業への理解を深めていきました。卒業後は、秋田県の「フロンティア育成研修」を経て、令和元年、就農と同時に兄の経営する鉄工所に勤務。食育ができるオープンカフェや高校生との日本酒の共同開発を目標に、日々奮闘しています。

▶ きっかけ

小さいころから祖父や父が農作業をしている姿を見て育ち、いずれ自分も農業を継ぐのかなと漠然と思っていました。デスクワークより体を動かす仕事をしたいと考えていたので、迷いはありませんでした。親元就農のため、必要な農機具などはほぼ揃っており、購入するものはなかったため、初期投資の心配もありませんでした。



水を張ったプール育苗

▶ 取組

鉄工所に勤務しながら、水稻と大豆栽培等に取り組んでいます。野菜は家族が栽培している品目と被らないように少量多品目を栽培し、母校の直売所などで販売しています。

就農してから、秋田県の「仙北地区農業近代化ゼミナール連絡協議会(通称わかじえファーマーズ)」に加入し、

同年代の農業者と様々な活動を楽しんでいます。なかでも東北の農業青年が集結する「東北農村青年会議」は、研究活動の報告や、現地研修等が行われ、とても勉強になります。



ブームスプレーヤーに乗ってご機嫌なさくらさん
 国のみどり戦略を、4Hクラブやゼミの活動などで学習してきました。6年産米で試験的に中干し期間を延長し J-クレジットに取組みました。収量に影響がなかったため、7年産米は取組面積を増やす予定としています。

また、化学肥料の使用を削減するため、土壌診断も考えているところです。

この地域の農家は、祖父の世代が現役で活躍しており、自分の農地は自分で耕作する意識が強いため、なかなか農地の集約や法人の設立が進まない状況にあります。今後は、地域農業を守り、

発展させるため、農地の受託や法人の設立を考えていかなければと思っています。



野菜の播種作業の準備

▶ これから

フロンティア育成研修では酒造好適米の育種に取り組んでいました。その経験を活かして地元の酒造会社と連携し、さらに高校生達を巻き込み日本酒の共同開発を実現したいと思います。高校生はお酒を飲むことはできませんが、自分達が開発に携わったお酒で、成人式のお祝いなどで乾杯できたら最高ですね。子供達が遊びながら食について学べるオープンカフェも作ってみたいと思います。

また、今育てているキウイフルーツや野菜で、6次産業化にも挑戦したいと考えています。

宝川で餅づくり 37 年、女性の活躍を後押しする！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



事業者名 宝川みさこ餅会
(秋田市)

代表者 木山 美佐子

経営概況

経 営 | 餅加工製造
商 品 | あんびん、大福、草餅、おやき、ごま餅、笹まき、あられ、あんこ、きなこ等
従 業 員 | 10 名
販 売 先 | JA 直販所、県内スーパーマーケット等

秋田市の宝川地域で米作りに携わり、地元の良質な水と土壌に触れた経験から、そこで採れた食材を利用し、化学調味料や保存料を使わない、無添加にこだわった餅を作っている女性がいます。地域で女性の雇用を創出し、女性が活躍する場の仕組みづくりにも取り組んでいます。

▶ きっかけ

代表の木山さんは、結婚を機に嫁ぎ先で家業の米作りに挑戦しましたが、それだけでは物足りないと感じました。秋田といえば「米」。米を原料に何か作りたいと思い、餅に目をつけ平成元年に近所の友人と加工所を造り、地元の農家のもち米を使用した餅作りを始めました。



●加工所での餅菓子作り



商品のあんびん(よもぎ、かぼちゃ、黒豆)

は季節ごとにかわります。

日ごとに売れる個数を記録しており、それに基づき、商品の作る数を決めます。餅の作り方については、「時間はかかるが餅に習うしかない。ご飯を作ってきた人ならきっとできる。」と話されました。

取引先は、コンビニへの飛込み営業を皮切りに、JAの直売所など徐々に販売先を確保してきました。

平成 18 年に秋田市地域特産品の認定を受け、さらに地元のスーパーなどにも取引が広がったため、平成 24 年に加工所を拡大し生産量を増やしました。

▶ 受賞

木山さんは、宝川地域で農業に携わったことで、餅づくりを思いつき、いろいろな所に営業をしてきました。また、餅を作り続けたことで、地域の雇用を創出

し、女性の活躍を後押ししてきました。

こうした長年の活動が、農業分野のみならず、経済分野での男女共同参画の推進に貢献したとして評価され、平成 27 年に「秋田県男女共同参画社会づくり表彰(ハーモニー賞)」を受賞、さらに平成 28 年に「男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」を受賞しました。

受賞に関しては「家族の心強い理解と協力があったから」と話されています。

▶ これから

定番商品に加え、ノンフライの「あられ」を製造し販売したところ、県内外で好評を得たことなどから、会の皆さんの協力を得て、今後も体力が続く限り続けていきたいと話されました。



●宝川みさこ餅会のみなさん

(●写真:宝川みさこ餅会提供)

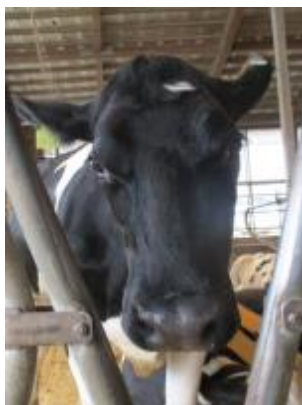
▶ 取組

従業員は近所の主婦を中心に 10 名。「宝川みさこ餅会」の会員として雇用し、各自の都合に合わせた勤務表にしています。今年初めて男性を雇用しました。

作業は、朝4時にもち米を蒸し、5時半から作り始め、8時半までにその日の出荷分を作り終えます。無添加であるため日持ちがしないので9時には作りたての商品を配送します。午前中には、翌日の仕込みも終えます。「あんびん」などの餅は、全部で 20～30 種類作っており、内容

ストレスのない環境を整え良質な生乳生産を目指す

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



事業者名:農事組合法人 細越牧場
(三種町豊岡)

代表者 細越 大紀

経営概況

飼養頭数 | 乳用牛約 320 頭

作 物 | 牧草(約 75ha)

| WCS 用稲(約 50ha)

構 成 員 | 10 名(正社員8名、アルバイト2名)

販 売 先 | JA 全農

県内でも最大規模の乳用牛の飼養頭数を誇る細越牧場で、令和5年に32歳で父親から酪農事業を継承し、町やJA、耕種農家と耕畜連携を図りながら、ストレスを与えない飼育環境を整備し、栄養価の高い飼料を与えて良質で美味しい生乳の生産を目指す若き酪農家の日々の奮闘を紹介します。

▶ きっかけ

幼いころから酪農を営む父親の背中を見てきた大紀さんは、いつかは、酪農経営を引き継ぐと決め、学校が休みの日には、当たり前のように作業を手伝っていたそうです。大学卒業後は、病院の臨床検査技師として働いていましたが、父親の経営規模拡大をきっかけに平成29年、26歳で就農しました。

就農後は、酪農経営のノウハウを習得しつつ、飼養管理技術に磨きをかけたそうです。令和5年、32歳の若さで、父親から事業継承し、現在は、10名の従業員とともに良質な生乳生産に取り組んでいます。



約150頭飼養できる大規模畜舎

水田約50haでWCS用稲の生産体制を整備。牧草については、細越牧場が県所有地と県立大学所有の農地約75haを借り受け、チモシーやアルファルファを作付け、年3回の収穫を予定しています。生産された粗飼料は、TMRミキサーにより濃厚飼料と混合して朝夕2回給餌するそうです。



ストレスなく伸び伸び育つ牛たち

また、獣医師の定期的な巡回や少数で牛の健康状態や繁殖行動、乳量等のデータが確認できる「Afiシステム」を導入し、牛の変化をいち早く発見できる体制を整えています。こうした取り組みにより、一日の搾乳量は約10tとなっています。

▶ これから

近年の飼料価格の高騰が経営を大きく圧迫することから、安定的な飼料確保のため、耕種農家との連携を大切にしていきたい。当面は、アニマルウェルフェアに配慮した飼養管理を行い、消費者に安全で良質な牛乳を届けたいと話していただきました。



衛生管理されたミルクングパーラー

▶ 衛生・健康管理の取組

細越牧場では、畜産クラスター事業等、国や県の事業を活用して、衛生管理や搾乳時間の削減を目的にミルクングパーラーやバルククーラー等を整備するとともに、牛にストレスを与えないフリーストール方式の畜舎を新たに2棟増設しました。農事組合法人を設立した平成21年約50頭だった牛は、現在約320頭まで増頭されています。

▶ 飼料生産の取組

国産飼料の供給にこだわり、令和7年産では、町内の耕種農家と連携し、

夢ある儲かる農業の先駆者を目指して

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



横手市(平鹿町)

株式会社 SEEDs 代表取締役 熊切 達也

経営概況

経営面積 | ハウス 35 棟

作物 | 菌床しいたけ、とうもろこし、アスパラガス、トマト等

販売先 | JA、大手スーパー等

社員 | 正社員4名、パートタイマー10名

海外等でスキー・スノーボードのインストラクターやアパレル業界など、様々な職種で仕事をしていた株式会社 SEEDs の熊切代表取締役は、結婚を機に妻の実家である横手市に移住しました。農業を儲かる産業の一つの手段として捉え、農業という既成概念の壁を壊し、夢のある儲かる農業を目指して、様々な取り組みに休みなく奔走しながらも、常に新しい取組を模索しています。

▶ きっかけ

静岡県出身で、海外等でスキー・スノーボードのインストラクターやアパレル業界など、様々な職種を経験していた熊切さん。農業は全く経験がありませんでしたが、農業は儲かる産業になると思い、義父のハウスを承継し、菌床しいたけやトマト等の栽培を始めました。



菌床しいたけを収穫する熊切さん

▶ 取組

菌床しいたけは、高品質な品種に絞った栽培や独自ブランドを作り、差別化を図った取組を行っています。トマトは、農林水産省の環境負荷低減の取組「見える化」を取得、アスパラガスは、有機栽培へ転換中で、環境にも配慮した栽培方法にこだわって

います。とうもろこしは、見た目のインパクトや生でも食べられる白いとうもろこしの品種「ホワイトレディ」の栽培に取り組んでいます。乾燥しいたけや干しいもなど、農作物の加工も手掛け、休む暇もなく働いています。

また、廃菌床を活用した土壌改良にも積極的に取り組むなど、作物の品質向上への探求は尽きません。

さらには、スマート技術にも着目し、菌床しいたけの栽培管理をデータ化し、YouTube を使った配信サービスや農業未経験者でも、適期に収穫できるスマートグラスを使った技術開発にも取り組んでいます。



白いとうもろこし「ホワイトレディ」

▶ これから

農業を多くの若者に、職業として選択してもらうため、他産業並みの儲けを生み出し、魅力ある仕事の間として提供したいと考えています。



有機栽培へ転換中のアスパラガス

そのためには、熊切が作った農産物だったら欲しいと、「B to F(Fun)」を意識して、多くの熊切ファンを増やすことがカギだと考えています。

「農 Limit」(壁を壊す)をビジョンに掲げ、農業界を「Rebranding」(作り変え)し、夢のある儲かる魅力的な農業の未来を目指して、日々、試行錯誤していきたいと話していただきました。

(写真:株式会社 SEEDs 提供)

400 年超える伝統農業から現代型営農モデル探る！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



事業者名 株式会社権右衛門
(にかほ市)

代表取締役会長 須田 貴志

経営概

経営面積 | 53ha

作物 | 水稻、秋冬ねぎ、春まきたまねぎ、そば

構成員 | 正社員4名、アルバイト 31 名

販売先 | JA、卸売業者、飲食店、
首都圏の学校給食事業者



株式会社権右衛門 HP

株式会社権右衛門(ごんうえもん)は、鳥海山と日本海を臨み、景勝地としても知られる「にかほ市象潟」で農業を営んでいます。名前は、先祖の「権右衛門」にちなみ名付けました。法人化してまだ5年目ですが、スマート農業や環境負荷の低い水稻の営農モデルの構築を駆使した持続可能な農業の環境づくりで、すでに地域を導く存在になっています。

▶ きっかけ

須田会長は高校卒業後、東京の会社に就職しましたが 25 歳の時に実家に戻り、家業の農業に従事しました。

地域では農業者の高齢化や担い手不足から耕作放棄地が増えており、地域そのものが衰退していくことに危機感を持っていました。解決のためには、受け皿となる組織が必要と考えていた折、甥(代表取締役社長)が自分と一緒に農業を始めたことをきっかけに、令和3年1月に法人化しました。



●従業員の皆さん

▶ 取組

主力の水稻は、父の代から農薬を使用しない環境保全型農業に取り組んでおり、販売は父が仲間と立ち上げた「有限会社なるほど舎」が行い、大手卸や首都圏の学校給食事業者、飲食店、個人のお客様に届けています。

生産は「権右衛門」、販売は「なるほど舎」と分担することで自分たちは栽培に専念できる環境にあるということです。

農薬に頼らない農業で、最も手間のかかる作業は「除草」です。令和4年5月からは、スマート農業を活用した環境負荷の低い水稻の営農モデルの構築を目指すため、にかほ市ほか4者の連携協定に参加し、抑草ロボットと乗用除草機を組み合わせた抑・除草体系を確立する実証試験に取り組んでいます。気温の上昇に連れ、年々雑草の勢いが増し、除草回数も増えていることが課題の一つとなっています。

また、権右衛門は毎年「インターンシップ」で若者を受け入れ、農作業体験を通し農業の魅力など伝えています。



●実装試験中の抑草ロボット

▶ これから

権右衛門には離農農家から農地が集まり、現在では、にかほ市の9地区で広域に農地を管理しています。会社としては効率化のため農地を集約しなければなりません、農業が出来なくなった地域で請負いを止めてしまえば、そこに担い手がなくなり、やがて地域コミュニティそのものがなくなってしまいます。

須田会長は「農業に関心を持つ若者を雇用し農業を知ってもらい、その人が独立する際に、借り入れ農地を譲り渡すことで、地域の新たな担い手にしたい。最初は農業機械の貸出や作業の請負いなどでサポートし、地域に根付かせたい。」と、高齢化の進む農村で、農地の出し手も受け手も共倒れせずに営農する方策について話してくれました。



稲刈りの作業風景

(●写真:株式会社権右衛門提供)

親子で新規就農! GI「大館とんぶり」を未来へ

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



大館市川口

小畑 貴則(52 歳)

小畑 祐真(24 歳)

経営概況

作物 | とんぶり(約 1.8ha)
| アスパラガス(約 30a)
| きゅうり(約 20a)
販売先 | JA あきた北

「とんぶり」は、アカザ科ホウキギ属の一年草であるホウキギの実を原料とした加工品です。食感がプチプチとした魚の卵に似ていることから「畑のキャビア」とも呼ばれています。平成 29 年 5 月には、「大館とんぶり」が地理的表示保護制度(GI)に登録され、令和 7 年 3 月には、「大館のとんぶり製造技術」が国の登録無形民俗文化財に登録されました。明るい話題がある反面、担い手不足が深刻で前途が危惧されている中、地域特産物を絶やすまいと、新たにとんぶり生産に取り組む親子を紹介します。

▶ きっかけ

約 30 年間営業の仕事をしてきた貴則さんは、40 代の頃から将来の年金生活に不安を抱いていました。そんな折、祖母の畑で野菜を育てる機会があり、「農業であれば年齢関係なく長く続けられる職業なのでは・・・」と考え、50 歳の時に就農することを決意しました。奥様に反対されることを覚悟の上、相談したところ、二つ返事で快諾してくれました。



とんぶりの原料となるホウキギの収穫作業

一方、祐真さんは、仙台市の医療系の大学に進学。訳あって中退し、アルバイト生活をしていた 22 歳の時、貴則さんから、「一緒に農業やらないか!」と誘われたとのこと。当時、特にやることもなく、簡単そうとの理由から引き受けたそうです。

▶ 親子で新規就農

右も左も分からず、農業の世界に飛び込んだ二人は、大館市や JA、ベテラン農家等からの助言で収益性の高いアスパラガス、きゅうりでの取組を決めましたが、冬場の収益確保に一抹の不安があったそうです。そんな中、大館とんぶり生産組合が、担い手不足解消のため、門外不出とされてきたとんぶり製法を公開するとその情報を知り、年間を通じて作業ができ、収益が見込めると考え、とんぶり生産への挑戦を決めたそうです。



数十回繰り返されるとんぶりの洗い作業

とんぶり生産への挑戦

取組が決まってからは、地域の農家から農地を借り受け、大館とんぶり生産組合からは、技術指導はもちろん機械の貸出、作業の手伝いに至る

まで手厚いサポートがあったそうで、「とんぶりを絶やすまい」との熱意を感じたそうです。特に除草作業や病害虫防除等では、皆さんから指導していただき、感謝しているとのことでした。



将来の夢について語る小畑さん親子

▶ これから

お二人からは、とにかく栽培技術の習得、向上が第一とのこと。次に次男も一緒に農業をやりたいと熱望していることから、収入を安定させること。そして、とんぶりを主軸として法人化し、経営規模を拡大できたらと将来展望を話していただきました。これからの活躍に大いに期待です。

楽しく働き、多くの人に喜ばれる花を届ける！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



羽後町 高橋 有佳理
(農事組合法人 足田営農組合)

経営概況

経営面積 | 水稲 30ha、ハウス 18 棟
作 物 | 水稲、花き、野菜
販 売 先 | JA うご、道の駅等
社 員 | 代表理事ほか 10 名

羽後町の農家で3姉妹の末っ子として生まれ、父の影響を受け農業に魅力を感じた高橋さん。県の「未来農業のフロンティア育成研修」を経て 2012 年に就農し、主に花き栽培を担当。湯沢市で開催された「第 148 回秋田県種苗交換会」に出品した切り花トルコギキョウの「エスライトピンク」で、秋田県知事賞を受賞しました。

▶ きっかけ

農業に囲まれた環境で育ち、農家として働く父の姿から、自然に就農を考えた高橋さん。高校卒業後、2年間の「未来農業のフロンティア育成研修」後、父の今泉 久さんが代表を務める「農事組合法人 足田営農組合」で就農しました。



鮮やかに色づく葉ボタン

▶ 取組

同法人では、水稲のほか、花き、野菜をハウスで栽培し、季節に応じた作物を通年で出荷しています。

就農当初は小菊を担当していましたが、トルコギキョウ、葉ボタンやランキュラスなどの花き全般を管理するようになり、品質を向上させるため日々目を配りながらきめ細かな栽培に取り組んでいます。

昨今の各種資材の高騰、夏の高湿や大雨、冬の雪対策に苦慮していますが、代表を含む社員一同で協力しながら対応しています。

「同世代のサラリーマンは、大変そうにみえる。」と話す高橋さん。同法人では、労働力確保のため柔軟な勤務体系を導入していることから、毎朝お子さんを保育園に送り届けてから出勤するなど時間を有効に活用できています。また、収入も安定しており、毎日、充実した生活をおくれています。



種苗交換会表彰式での高橋さん

愛情を注ぎ、大切に育てたトルコギキョウを今年の秋田県種苗交換会へ出品したところ、見事に秋田県知事賞に輝きました。

▶ これから

「花の栽培は、その花の状態に合わせた管理が必要なため手が掛かるが、法人の一員として高品質の花を安定して出荷できるよう、さらなる技術の向上を目指している。自分の伸びしろはまだまだある。特にトルコギキョウに力を入れ、多くの人に喜んでもらえるよう、楽しみながら究めていきたい。」との事。



冬期間は羽後町特産のふくたちも担当
(はくさいを寒い時期に育て結球させずに収穫する)

また、『花きは、比較的価格が安定している状況にあるが、安価な年もある。昔から父がよく言っていた「いい時もあるれば悪い時もある。波があるのが農業だ。」の意味がわかり始めてきた。』と話して下さいました。

(●印写真:うご農業協同組合提供)

ワインづくりに挑む若き農業者～地域の未来を描く

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



TOYOSHIMA FARM 株式会社
代表取締役 豊島 昂生(35 歳)



TOYOSHIMA FARM

経営概況

経営面積 | 2ha
作物 | ぶどう(ワイン用品種)
販売先 | 県内の酒屋、土産物店
オンラインストア、自社イベント等
社員 | 代表取締役ほか1名

鳥海山を仰ぎ見る由利本荘市矢島町の山間地で、自分が育てたぶどうでワインづくりに取り組む若者を紹介します。気温が低く、冬は豪雪。夏も雨の日が多く日照時間が短いという、およそワインの名産地とは真逆の環境で、一からぶどう作りをはじめ、9年目の2024年にクラウドファンディングなどを活用し、ついにワイナリーをオープンさせました。

▶ きっかけ

大阪で会計事務所に勤めていた豊島さんは、過労で体調を崩したことをきっかけに秋田へ帰りました。改めて故郷の姿を見て「この風景を守りたい」という思いから農業を志しました。

米価の低迷を背景に、父から「米以外の新しい挑戦を」と促され、地域活性化の事例を調べる中でワイン用ぶどう栽培に可能性を見出します。

秋田県果樹試験場や山梨県で技術を学び、2016年に土地を借り栽培を開始。初収穫まで3年、実用収量まで5年という長い挑戦が始まりました。



●家族やボランティアも協力する収穫作業

当初、収穫したぶどうは隣県のワイナリーに委託してワインにしてもらいましたが、コストが高くあまり利益が出ませんでした。そのため、ぶどうジュース

の販売も始めたところ、こちらが予想以上に好評で、収益の柱になっていました。

▶ 豪雪地帯でのワインづくり

豪雪地帯ならではの課題に対応するため、北海道式垣根仕立てを導入し、雪害を防ぐ工夫を重ねています。冬季に行うことが普通の剪定も、ここでは雪が降る前が勝負です。



●念願の「ワイナリー」が完成

開業したワイナリーは資材価格の高騰もあり、最初に考えたよりも規模の小さなものになりましたが、「その自分自分が作りたいワインを作れる」と前向きです。地域の冷涼な気候を活かした酸味と果実味の調和を目指し命名したブランド「アルモニ秋田」など、飲みやすいワインづくりを目指しています。

(アルモニはフランス語で「調和」)。

豊島さんは、ぶどうの管理から醸造、ラベル貼りから営業・販売まで、ほぼ一人で手掛けていますが、収穫などで人手が必要な時期は、家族や仲間(「ヴィンヤードサポーター」)が手伝ってくれます。

また、地元の飲食店などがテイスティングイベントを開いたり、鉄道会社がツアーに組み込んでくれたりと、応援してくれる人達もたくさんいます。



●月一ペースで開く「ワイナリー開放デー」

▶ これから

豊島さんは、ワイナリーを観光や食と結びつけ、地域に人を呼び込む拠点にしたいと考えています。「農業の新しい可能性を示すことで持続可能な農業モデルを確立し、次世代が受け継げる仕組みを作りたい。」と語っていただきました。

●印写真: TOYOSHIMA FARM 提供

養蜂で秋田県農業の一助になりたい！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



八峰町石川

米森養蜂園 代表 米森 朋子

経営概況

養 蜂 | 養蜂箱100群※(1群 約3万匹)
構 成 員 | 基本代表1名で作業、繁忙期に作業
手伝い(母、友人)2名程度
販 売 先 | 道の駅、ネット通販、ふるさと納税
直販

※ミツバチは、ひとつの巣箱を「群(ぐん)」
という単位で数える。



米森養蜂園

秋田県北西部に位置し、日本海と世界自然遺産白神山地の豊かな自然に囲まれた町、八峰町でミツバチの飼育から採蜜作業に昼夜を問わず奔走する一人の女性がいます。養蜂業を営んでいた祖父が、昭和38年の「石川の大火」により、継続を断念した思いを汲み、経験値ゼロから養蜂業に取り組んだ米森さんの悪戦苦闘の日々や将来の夢について紹介します。

▶ きっかけ

八峰町で生まれ育った米森さんは、高校卒業後に上京し、貿易関係の会社に勤めていましたが、30歳の時に家庭の事情により、急遽Uターンすることになりました。帰郷後は、農家として生きる道を考え、実家の畑でミョウガやキウイの生産を始めました。その際、祖父からキウイの受粉に「養蜂なら教えられる」とミツバチを活用する提案を受け、迎え入れたことが養蜂業の入口だったそうです。



当時の苦労話を語る米森さん

▶ 経験値ゼロ悪戦苦闘の日々

「養蜂なら教えられる」と言われたものの、祖父からの直接指導はなく、地域に教えてくれる人も居なかったことから、令和元年頃に巣箱1群で趣味レベルでのスタートだったそうです。インターネットを駆使したり、遠方の養蜂家へ

出向き、「ミツバチの生態」や「養蜂とは？」等を独学で学びました。その中で、受粉媒介者としてのミツバチの役割に深く感銘を受け、養蜂業一本で行くことに決めました。



そば畑で採蜜に励むミツバチ

▶ 養蜂業は苦労の連続

現在は、約100群のミツバチを飼育して、4月から7月が採蜜の繁忙期となります。採蜜場1か所に約20～30群を軽トラックに積み、花の開花期に合わせて、群の移動のため野山を駆け回るそうです。基本、夜間に群の積み降ろしを行うことから、この期間は、重労働と睡眠不足が重なります。8月から10月には、地域のそば畑の受粉に協力しており、地域農業への貢献を実感しているそうです。11月になると越冬準備に入る等、年間を通じて多忙を極めており、何度辞めようかと

思ったとのこと。しかし、丹精込めて育てたハチ達が懸命に蜜を採取する姿を見るたびに愛着も深まり、生業として続けようと思いが強くなるとのことです。



米森養蜂園のハチミツ商品(一部)

▶ これから……

米森さんは、「養蜂を始めて7年目ですが、まだまだ技術も経験も不足です。」と話します。ですが、今後は、100群規模で、毎年、最低限必要な採蜜量を確保する体制を築くこと。その上で人を雇用できたら……。将来的には、耕作放棄地での養蜂の活用、野菜や果樹農家との連携等、地域の美しい環境が失われないよう秋田県農業へ養蜂で貢献できればと壮大な夢を話していただきました。

(●印写真:米森養蜂園提供)

先進的な取組で法人経営の発展を目指す！

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



美郷町鍵田
株式会社 やりだ
代表取締役 田口 慶明

経営概況

経営面積 | 37ha
作物 | 水稻、大豆、枝豆、セリ
販売先 | 県内販売事業者、JA など
社員 | 代表取締役ほか3名
パート1名

農業未経験者にもかかわらず前職をやめて 30 才で農業法人へ就農し、8年後には法人の代表になった田口慶明さん。組織を株式会社化し、水稻の乾田直播栽培や輸出用米など先進的な取り組みや、JA と共同で子供達の食育事業も検討しながら会社の安定経営を目指しています。

▶ きっかけ

農業とはまったく接点のない仕事をしてきた慶明さんですが、祖父が地域にある農業法人の代表を努めていました。法人は年々役員の高齢化が進み、組織の存続が危ぶまれていました。そういった現状を目の当たりにして組織を立て直そうと決心し、2018 年に 30 才で就農しました。



田植機を改造したスプレーヤーで畦畔の除草剤散布作業 ●

▶ 取組

農業の経験が全くなかったことから、祖父から稲作のノウハウを得たいと思っていました。しかし、昔気質の祖父からは細かいことは教えてもらえず、SNS などを駆使して作業 や栽培

管理などの詳細な情報を収集しながら、実践し、こつこつと経験を積み重ねてきました。

2025 年3月に農業法人の代表理事に就任しました。経営に携わるようになり、組織の決定権が分散し、物事がスムーズに進んでいないと感じ、1年後の 2026 年3月に株式会社へ組織変更し、スピード感を持った運営にシフトしました。



ドローンで農業散布 ●

また、輸出用米にも取り組むことで流通業者と話を進めています。

2年前からハウスを整備し、地下水を利用したセリの栽培にも取り組んでいます。



近くの認定こども園の畑での作業 ●

▶ これから

将来的に経営面積が増加することを見据えて、乾燥・調製施設を整備するため、国の事業に応募しています。

また、JA 青年部の役員として、近くのこども園で野菜栽培を通じて子供達への食育活動を行っています。今後は地元の JA と共同で食育事業を展開したいと考えています。

(●印写真: やりだ提供)



みどりの食料
システム戦略
あなたのeatが
地球のeコトに

発行：東北農政局秋田県拠点地方参事官室
住所：秋田市山王 7-1-5
TEL：018-862-5611
令和 8 年4月作成